

8月19日

中学二年 R・S

「一位は松本梨香さんです」

「おめでとう！」

「すごいじゃない、梨香！」

「いえいえ、先生のおかげですよ！」

梨香が私を見て微笑に笑った。「してやった」とでもいうような顔で。

「なんであんなにミスを連発した挙句、急に演奏をやめたの？ これじゃあ、なんでコンクールに参加したのかわからないじゃない！ まったく……。わかったなら、次のコンクールに向けて早く練習しないと……。えっと次は……」

「お母さん、もうやめて……。これ以上、もうピアノなんて弾きたくないよ……」

「え……。？ あんた、何を言っているの？ そんな馬鹿馬鹿しいこと言っただいで早く練習……」

「もうやめるって今、言ったよね!!」

私は勢いよく扉を閉めた。何も考えなくなかった。

榎本天音、十五歳、中学三年生。学校の成績は普通。何の特徴のないただの平凡な女子。

ただ、これだけは譲れないというものはあった。

「ピアノ」だった。

昔はよく好んでピアノを一日中弾いていたらしい。私は今までピアノがすべてだったから、何の疑いの余地なく、楽しく弾いていた。おそらく父の影響だろう。

父はピアニストで、私の誇りだった。父は私にピアノという楽器の美しさと、音楽のすばらしさをいつも語ってくれて、私はピアノの世界に魅了された。それからしばらくして、父はあまり売れなくなっていた。どんどん収入がなくなっていく、母がアルバイトをやり始める、という始末だった。父の心は傷付き、乱暴になっていった。去年、父は亡くなった。理由はいろいろ。心の限界が来ていたことや、がんを患っていたこと。そのすべてが重なり、こうなってしまうのだらう。認めてもらえないことの辛さは自分が想像しているよりもはるかに辛いことを知った。それから父の思いを受け継いでピアノをやっていた。父が死んだあとはピアノ教室に通い始めた。初めのころは、先生は熱心にピアノを教えてくれた。理由は決まっている。私は「神童」と呼ばれていた。小学二年生で、モーツアルトの曲などを弾いていたし、コンクールでは必ず一位を取っていた。しかし、最近私にはあまり熱心に教えてくれなくなっていた。

松本梨香。私と同じクラスの子。先生はこの子の音に夢中になっていた。つまり、私は「用なしのガラクタ」になっていた。

松本梨香は私よりもはるかに遅くピアノを始めたのに、私の予想した速度の

はるか上を行って私に追い付いてきた。正直、梨香が怖かった。近い将来、私は追い抜かれるのかと焦った。しまいには、自分が出そうとしている音が出なくなり、ピアノに触るのが怖くなっていた。

八月十九日。コンクールの本選。この日のことは、生涯私の記憶の中に深く刻まれるであろう。私がピアノをやめるきっかけになった日。

私の前の番が、最悪なことに松本梨香だった。梨香は見事に弾ききった。彼女が自由曲で弾いた曲はモーツアルトの「きらきら星変奏曲」だった。彼女の音はキラキラしていた。きらきら星のように。そして何より最悪だったのが：私も自由曲で「きらきら星変奏曲」を弾く予定だった。とても嫌だった。梨香が弾き終わった後は、喝采の嵐だった。梨香が帰り際に私に向かって、「あなたにできる？ 天才ちゃん？」とささやいてきたことは、覚えている。

いよいよ私の番だった。母も審査員も観客もみんな私に注目していて、怖かった。大きな期待をされているような気がして。私は、梨香みたいな演奏はできないよ：：：そう観客に心の中で言い聞かせた。手はずと震えたまま、私のメンタルは崩壊していた。

弾き始めたら、心臓が限界に達し、集中できなくなっていた。落ち着け、落ち着け！ どんなに自分に言い聞かせても、だめだった。案の定、さんざんミスを連発し、さんざん弾き直した課題曲だった。そして自由曲の方はというと、途中で演奏を止めてしまった。相当、無残な姿だったと思う。結果は、松本梨香が一位。松本梨香と榎本天音の技術、音の美しさの圧倒的な格差。その現実を突きつけられた私は、本当の「落ちこぼれ」になった。

そして今に至る。

次の日、私は学校に行った。もう言われる覚悟はできていた。相変わらず母とは決別中。気がとても重かった。登校した早々、視線をたくさん感じた。陰口が聞こえるが、聞こえないふりをした。教室へ行ったら、梨香の周りには人が多く集まっていた。すべて予想通り。

授業は集中できず、ぼんやりしたままだった。昼休み、梨香に呼ばれ屋上に行った。まあ、大体言われることの予想はついていたが。

「あ、負け犬だ。それより、昨日の演奏は何？ 全然できていなくて、あんたがみじめに思えてきたわ。先生がかわいそう……。なんかいったらどうなの？」
「だから、それがなんだっていうの？ ほっといてって言ったよね？ 覚えていないの？」

「あんた、あんな中途半端な気持ちでコンクールに参加していたの？ なめているの？ 出場者のことをなめてるよね？ どうせ、自分が一位だって思っただけで軽い気持ちで来てたんでしょ？ そりゃあ、負けるよね？ 私は必死の思いで来たんだから、あんたと同じにされたくないの」

「あなたに説教される筋合いはないと思うんだけど？ 言っておくけど、私、ピアノ辞めたから。今日、先生と話をつけてくるから。お母さんはどうでもい

いけど。それより、私の休み時間の邪魔しないで？」

「へー、やっぱりあんたは『負け犬』なんだ」

足早にその場にその場を離れた。悔しいけど、あいつの言うとおりだったのかもしれない。私は、あんな奴に負けたんだ。本当に「負け犬」なんだ。なめているつもりはなかったのだが……。

その日のうちにピアノの先生とは話をつけた。やめると言ったら、大げさに残念がっていた。余計なお世話だ。もう興味なくせに……。その後、母にピアノを本当にやめることを伝えたら、何か言いたそうではあったが、「そう」の一言で、何も言わなかった。もう、私にピアニストとしての価値がなくなったということだろう。

一年後、私は高校一年になった。

今は普通の女子高校生で真面目に勉強しているし、きちんとした友達もいる。たくさん渋谷や原宿で遊び、高校生活を楽しんでた。ピアノをやめて心が軽くなったが、寂しさも出てきて複雑だった。時々、「ピアノはやめたのか？」と聞かれたが、適当にスルーしていた。

十一月になって、なぜか駅にピアノが設置された。どうせ弾く人はいないだろうかと思ったら、その次の日、その設置されたピアノに変化があった。誰かが弾いていた。私が好きな曲をひいていた。ショパンのワルツ第1番 変ホ長調^{Op. 18}「華麗なる大円舞曲」。その曲名の通り、華やかでいかにもワルツという感じだ。その人のワルツは、本当に華やかで、堂々としていた。すごく自信があるような力強い音を奏でていて、思わず聴きほれてしまい最後まで聴いていた。いきなりその人が振り向いて、私に話しかけてきた。

「あなた、ピアノ好きなの？ あなたも、ピアノのとりこになった人？」

「えっ！ いや、違います。ピアノは嫌いです」

「どうして？」

「理由をあなたに説明する必要はないと思うんですけど？」

「ふーん……。あなた、友達いない系？」

「失礼ですね。いますよ、ちゃんと……。あなたと私、初対面ですよね？」

「もう少し優しくしてくれたらいいのに……。それより、あなた、嘘ついでしょ？」

「初対面の人に嘘をつくような性格はしていませんが……」

「大きくて長くてきれいな手……。あなた、ピアノをやっているんでしょう？」

「いや……。正確にはやって『た』ですけどね……」

「思い出した！ あなた、『榎本天音ちゃん』じゃない？」

「その名前……。言ってほしくなかったです……。まあ、榎本天音ですけど……」

「天音ちゃんさ、なんでピアノが嫌いなのに続けてたの？」

「親の遺言みたいなのに縛られて、やる以外の選択肢がなかったからです」

「やっぱり、あなた、嘘ついてる……。本当はいまでも好きなんでしょう？」

「だから……。ピアノは嫌いだとさつき言ったはずですが!!」

「嫌いって顔、全くしてないんだよね……。もう一度聞くよ? ピアノをどうしてやめちゃったの?」

その人の顔を見ると、自分のことを何でもさらけ出してもいいような気がした。そして今まで起きたこと、その時の気持ちをすべて話した。父のことや、コンクールのこと。松本梨香というやつが存在の大きさ。すべて話した後は、心の中の暗い闇が、明るくなったような気がした。その時初めて自分は、何でも相談できる、頼れる人が欲しかったんだということに気が付いた。

「そっか……。確かに、それじゃあ、ピアノからは逃げられないよね……。しかも、松本梨香ちゃんが、ライバルだったのか……。よく、今まで耐えてきたね。でもさ、松本梨香ちゃんのせいで、コンクールの演奏がダメになったっていうのは違うんじゃない? あなたはそれだけのことでピアノをやめたの?」

「あなたにとつては少しのことかもしれないけど、私にとつては、とても大きな出来事だったんです……。梨香がとても怖くて、集中できなくて……」

「違うよ。あのコンクールで……。いや、普段の練習でもあなたは、自分に負けてじぶんから逃げ出したの。そこが、自分の弱いところだとわかっていながらも、あなたは逃げだした。そうでしょう? 自分の立ち位置が他人にとられそうで怖かったら、必死になって練習して、どうにか守ろうとするでしょう?」

「だから! 私は……」

「まあ、でも……。あなたの気持ちは、わからなくもないよ。実際、私がそうだったし……」

「どういうことですか……?」

「まあ、その話はまた後日! 今日遅いからもう帰りましょう!」

「もう会いたくないんです……」

「またそんなひどいこと言つて……。一つだけいい? もしあなたが、まだピアノが好きで弾きたいという気持ちがあるのなら……。私があなたにピアノを教えてあげる」

「いや、だから……」

「別に強制じゃないよ? どうするかはあなたの自由。まあ、やるんだつたら、目指すは来年のあなたが去年出場したコンクールと同じコンクールの本選、八月十九日にまた出場して今度は、松本梨香ちゃんに勝つことだな!」

「いきなりそんなに言われても……。梨香に勝てるかどうかわからないし……」

「当然彼女は次も一位を狙つて頑張つてくると思うし、ほかの子も、本気を出して頑張つてくると思う。でも、あなたが出るとはみんな思っていないよ? そこで、あなたが出場すれば、出場者の人が動揺して、もしかしたら勝てるかもしれないよ?」

「あなたって、意外と性格悪いんですね」

「とにかく、未来のことは誰にもわからない。そうでしょう?」

なぜか、この人にならついていけそうな気がした。この人についていけば、もしかしたら梨香に勝てるかもしれない、と密かに期待をしてみた。根拠はないが。

「それともう一つ。実は、あなたの演奏を生コンクールで聴いたことがあるんだけど、その時の感想を言うと、ほかの人の音とあなたの音、明らかに違っ

ていて、驚いた。ほかの人よりも音がキラキラしていて、聴いていて気持ちよかった。正直なところ、私は松本梨香ちゃんよりもあなたの音の方がいいと思っただ。つまり……個人的にあなたの音の方が好きだったこと」

いきなり私の視界が明るくなった。なんだろう、この感情はと、自分に問いかけた。理解するのに時間がかかってしまったが、わかった。「ウレシイ」という気持ちだ。今まで忘れかけていた感情をこの人は思い出させてくれた。ああ、私が今まで言われたかった言葉をこの人が言ってくれた、と感謝の気持ちしか心の中になかった。

「私の名前は、『あなた』じゃないです。さつき、あなたが言っていたでしょ？ 一応、天音っていう名前がついているんです。それよりあなたの名前は？」

「そういえば、言っていなかったね。私の名前は、五十嵐美紀、三十六歳。よろしく！ そんじゃ、もし私に習いたいんだったら、明日、ここの駅の近くにある練習スタジオで待ち合わせね」

そう言っ、五十嵐さんは去っていった。五十嵐美紀という名前は、どこかで聞いたことがあるような気がしたが、スルーしておいた。こうして、私は五十嵐さんと出会った。後にこの人と出会って私にとって、大きな奇跡が起きる。

家に帰った後、ずっと悩んでいた。五十嵐さんについていくべきなのか、それとも行かずに、普通の女子高生のまま、このまま生活していくか。しかし、五十嵐さんとお会ったのは神様が与えてくれたチャンスかもしれないし、本当は、まだ……ピアノが好きだった。そう考えると、急に今の自分からどうにかして脱出したくなかった。そして、五十嵐さんについていくことに決めた。自分の選択を間違いだとは思わなかった。しかし、母に言うのだけはやめた。また、何か言われて面倒なことになるのは、うんざりしていたからだ。

次の日、私は学校を早めに出てスタジオに行った。部活には入っていないなかったので、丁度よかった。家にピアノはあるが、あのピアノからは少し離れたかった。いやなことを思い出してしまうから。スタジオに行ったら、五十嵐さんは席を離れているようだった。少しピアノに触ってみたら、急になつかしさが込み上げてきた。今すぐ弾きたい、そういう衝動にかられた。気付かれないように周りを見てからそっと椅子に座り、ピアノと向き合った。鍵盤に手を置く。これだけの作業でも、懐かしさを覚えた。指先が鍵盤の上を走りだした。弾いた曲は、コンクールで演奏を止めてしまった、「きらきら星変奏曲」だった。一年も弾いていなかったの、指はなまっついて思うように動かなかったが、とても楽しかった。こんな風にコンクールでも間違っても楽しく弾けたらよかった、と後悔した。

弾き終わりに五十嵐さんがいきなり入ってきた。なんと、私の演奏を聴いていたのだった。

「いや、なまってるね。でも楽しそう良かった」

そう言ってきた。多分、その時、私が想像しているのよりもはるかに私の顔は赤かったと思う。

始めは手があまり動かなかったので、ハノンから弾き始め、少しずつ指の感覚が戻ってきたら、ソナチネやソナタをやり始めた。五十嵐さんの指導は丁寧で、個人的に好きになっていった。何とも言えない温かさを感じた。昔習っていたピアノの先生とは真逆に。毎日とはいかないが、週に三回くらいは行っていた。家のピアノにも触りだした。ただし、母がいない時に。また、ピアノ漬けの日々が始まった。しかし、これは以前とは違う。以前は、無理やりやらされていく感じがあったが、今は、自分の意志でやっている。自分の思うままに進んでいる。これが自分の人生だと思うと、前に進みたくなった。しかし、それとは裏腹に学校の成績は下がり、友達もいなくなっていくてしまった。

そんなこんなで四か月後の三月。期末テストの成績を見て、母は驚愕した。私の成績が五十番も下がっていたからだ。今まで勉強に干渉しなかった母が、ついに動き出した。

「あんた、勉強もしないで、何やってるの？ 隠していることがあるなら、正直に言っ。ピアノをやめたら、勉強に集中するしかないのに……」

私は、ずっと黙っていた。何も言わない、何もばらさないと決めていた。母の怒りはヒートアップし、ますます勢いがついてしまった。ピアノをまた始めていることを知ったら、怒られるだろうし、かといってずっと黙っていてもさらに怒りがヒートアップして面倒なことになる。結局、次の高二の中間からは本気出す、とだけ言っ、とりあえず終わった。でも、いつかはピアノを続けていることを言わなければならないので、とても憂鬱だった。

高校二年生になり、練習は本格的になった。ある日、五十嵐さんから一つの課題が出された。自分が本当に好きな曲を一つ選んで練習するとういものだった。私は、「ラ・カンパネラ」を選んだ。この曲も私が好きな曲の一つだ。この曲でリストが好きになった。五十嵐さんの前で弾き終わった時、納得のいかない様子で、不安になった。

「ちゃんと練習してきた？ そもそも、この曲、本当に天音ちゃんの中で一番好きな曲なのかな？」

正直、こう言われ驚いた。結構、自信はあった。その後指摘され、ようやく気付いた。そもそもリズムが違うところがあり、強弱がついていないところもたくさんあり、自信があると言った自分が恥ずかしくなった。結局、もう一度選曲するところからやり直しになった。スタジオから家に帰る途中、ずっと自分が本当に好きな曲を考えていた。ふと、一つ、私の脳内によぎった曲があった。急いで家に帰って練習しようとしたら、母がいつもより早く帰ってきてしまったので、結局その日は練習できないまま終わってしまった。そして、その三日後、五十嵐さんにその曲を聴いてもらった。驚いてはいたが、弾き終わった後は笑っ。こう言っ。

「よし！ この曲をコンクールの本選の自由曲にしよう！」

そう言ってもらえてうれしかったのだが、まだ本選に行けるかどうかかわからないし、母にもまだピアノを続けていることを伝えていないので、正直不安だった。

五月になり、私に友達ができた。永野玲奈という名前の子だった。アニメ好きがきっかけで仲良くなった。きれいな顔をしていて、羨ましかった。友達になつて一週間後ぐらいに、玲奈が急にアニソンの話をしだした。

「天音さ、何のアニソンが好き？」

「アニソンは、わからないんだよね……。いつもアニメは録画してるからオーピングとエンディングはとぼしてるから聞いてないんだよね……」

「リアタイしてないの!! そりゃあ、そうだよ……。夜中の一時とか二時まで起きてられないよね……。でも、オーピングとエンディングとぼすなんてもつたない! いい曲ばかりなんだから! しかも、アニソン覚えてら、普通にカラオケ行く時、レパートリーに困らないのに!」

「カラオケは行ったことがないんだよね……」

「じゃあ、今度二人で行こう! でも、まずはアニソンを聞かないと……。私の一押しは『決戦スピリット』っていう曲。この曲を聴くと、とても勇気が湧いてきて、私はテニスの大会前とかによく聴いてる! もちろん、テスト前にも聴いてる……。この曲は、アニメ『ハイキュー!!』の第四期の第一クールのエンディング曲なんだよね! 明日感想聞くから、絶対、聴いてね!」

そう言われ、無理やり聴かされた。聴いてみると、玲奈が好きだという気持ちがあわかった。この曲を中三の時に見つけていれば良かったと後悔した。当時の私にとっても必要な言葉ばかりが歌詞に連ねてあった。それから、私はクラシックだけでなく、アニソンや、日本の曲も聴くようになった。次の日、早速玲奈が聞いてきたので、思わず笑ってしまった。感想は私が思ったことを正直に話し、ついでに過去のこともすべて話した。初めて、同い年の友達に私の過去のことを話した。正直、自分に驚いていたが、玲奈は私の過去について何も突っ込まず、話始めた。

「気に入ってくれたなら良かった! あの歌はね、実際アニメに出てくるたくさん登場人物のセリフも入れてあって、本当に最高の曲なんだよ! 沼にはまったなら、私をもつといい曲教えてあげる! 次は……」

こういう風に普通に会話できる子ができて安心した。この子なら信頼関係を築けるのではないかと思った。その日から、玲奈は私の「親友」になった。玲奈は私に新しい世界を教えてくれた。もちろん、本人はそう思われているなど知らないだろうし、ほかの人が聞いたら、大げさだと思いに違いないが。

五月の中旬になって、五十嵐さんに正直に伝えた。母にピアノを続けていることを言っていないことについて。

「言っていないならどうするの? 大会費は、お母様の方で出してもらわなきゃならないけど……。今から説得するのも時間がかかるんじゃない? 自分から辞めると言い出したのに、また自分から勝手に始めていることをお母様が知れば、なんで言っていないか怒られるかもしれないよ? 大会の応募締め切りは迫っている。早く言わないと……。そうだ! あなたが言うまで、私はここに来ないよ。一旦、教室は閉めます。早く、私に習いたいんだったら、お母様に早く本当のことを言うことだね!」

まずいことになってしまったが、覚悟を決め、母に全てを打ち明けることにした。母が帰ってきて、即座に話を切り出した。

「お母さん、話、聞いてもらっていい？ 実は……ある人にまた、ピアノを始めないかと言われ……。ピアノを去年の十一月からやり始めてました。今まで言っていないくて、ごめんなさい。それで……。お願いがあります。大会費を出していただけませんか？」

言ってしまったという恐怖しかなかった。

「それで、『はい』て、素直に言えると思う？ なんとなく私が帰ってきたときに少しピアノの音がするから、また始めたのかなとはうすうす思っていたけど……。とにかく、自分勝手すぎます。図々しいです。ピアノが好きだったら、あの時やめなければ良かったのに……」

「あの時は、ピアノから離れたかった……。理由、わかる？ あの時は無理やりやらされている感じだったからだよ！ ピアノをしようがなくなっている感じだった……。自分の気持ち弱かったからやめたってことはわかってる……。でも、ピアノを私に押し付けたお父さん……。いや、お母さんも悪いでしょう？」

「私は、あなたが、ピアノをやめると言った時、何も言わなかったはずです。なぜか？ あなたの選択を尊重したからです！ なんて、そんなこともわからないの？」

その言葉を聞いて、私は大きな勘違いをしていることに気付いた。母は、私の考えを尊重していた。でも、だからこそ、なんでコンクールの時、出ることを拒んだ私を無理やり出場させたのかわからなかった。

「じゃあ、なんで二年前、コンクールに出るのを嫌がった私をコンクールに出したのかわからない！」

「そこまで言うんだったら、条件を付けます。明後日、私の前で、ピアノを弾いてください。その時、私がコンクールに出場する価値があると思ったら、大会費を出します。でも、価値がないと判断したときは、コンクールはあきらめなさい」

戸惑った。うまく弾けるかどうかわからない。残された時間は、今日を入れて二日。私は、死ぬ気で練習をした。玲奈にすべて話したら、応援してると、熱いエールを送られた。それが、とても心強かった。

いよいよ、その日がやってきた。一応、五十嵐さんに伝えておいた。でも、既読がついただけで、何も返事は返ってこなかった。母が帰ってくるまで、「決戦スピリット」を聴いていた。もうお守り代わりの曲になっていた。母が帰ってきて、おもむろに椅子に座った。あの時を思い出した。二年前のコンクールのことを。もうあの時のようにはならないと、心に決め、ピアノに手を置き、弾き出した。私は、コンクールの本選で弾く曲を弾いた。ショパンの「華麗なる大円舞曲」。そう、五十嵐さんと初めて会った時に、五十嵐さんが弾いていた曲だった。この曲が私の中でも一番好きな曲だった。緊張はしていたが、弾いている時は、「楽しい」の一言しかなかった。弾き終わった後、私は、言い忘れていた自分の思いを打ち明けた。

「去年、まだピアノを弾いていなかったころ。なぜか寂しさを感じていた。そんな時に、今私にピアノを教えてくれてくれる人に出会って、やっと何で寂しい

のか分かった。ピアノが好きだつてことに気付いたの。だから今は、本気でピアノをやりたいと思っっている。このままずっとピアノを続けたいと思っっています。だから、お願いします」

「一年間、全くピアノを弾いていなかったのに、よくここまで弾けるようになったね。その人の腕は確かだね……。ごめんなさい。私は、あなたにどうしてもピアノを続けさせたかった。それが、あなたのお父さんの願いだっただけ……。でも、あなたにピアノをやめると言われ、気付いた。私は、あなたの気持ちを考えていなかった。あなたの人生は、あなたが決めなくちゃいけないのね……。あなたは、自分が何をしたいか探して結果的にピアノをやりたいという結論になった。あなたが、自分の生き方を自分で決められるようになって、とても私は、嬉しいです。約束通り、大会費を渡します。ただし、そこまで言ったからには、優勝してもらわないとね！」

信じられなかった。お母さんが、大会費を渡してくれるかどうか心配だったから。急いで、五十嵐さんに連絡した。その時の返事がこれだった。

「あなたならできると確信してた！」

いよいよ、予選まであと数日になった。スタジオ内の空気は少しピリピリしているかと思いきや、そうではなかった。五十嵐さんは普段通りだった。緊張しているのは私だけかと疑うほどだった。理由を聞くと、

「いつも通りにやれば緊張なんてしないよ。しかも、私はこういうのに慣れていくから、へーき」

と、涼しい顔をして言うので、逆に尊敬してしまった。

予選は通過した。そのことを三人にLINEで知らせたら、同じ答えが返ってきた。

「通過すると思ってた！」

八月十九日。ついに、本番を迎えた。今度は、五十嵐さんが来られないというので、会場には一人で行った。今日は、母や玲奈が来ている。失敗しないようにしないといけないとプレッシャーがかかり、押しつぶされそうだった。そして、最悪なことに、松本梨香にばれた。彼女も通過したのだと思うと、さすがだと思った。それと同時にまたプレッシャーがかかった。

「久しぶり、また、負けに来たのかな？ 落ちこぼれちゃん？」

「あんたには、関係ないでしょう？」

五十嵐さんに言われていた。何か言われても、スルーすると。でも、私の心は意外に強いので、問題なかった。

でも、やっぱり、怖かった。「本番」というものに立ち会っていると、途端に弱くなるという性格は変わってなかった。そのとたん、「決戦スピリット」の歌詞を思い出した。

プレッシャー それがどうした

神様の助けは要らない

私の前の人が終わりに、ついに私の番になった。なぜかきつきの歌詞を思い出すと、今までの自分の気持ち馬鹿らしくなった。

私の名前が呼ばれた時の観客の反応が五十嵐さんの予想した通りだった。どよめきが収まらない中でも私は舞台に立った。椅子に座って気持ちを落ち着かせ、鍵盤に指を置いた。ふと観客席を見ると、母と玲奈を見つけた。玲奈はフアイトと口を動かしていた。

五十嵐さんの言葉を思い出した。
「楽しんで弾いてこい！」

演奏を開始した。課題曲はショパンのソナタで、指がとても動く曲だったが、今日の指は絶好調だった。次のショパンの「華麗なる大円舞曲」は、私の勝負曲だった。楽しく弾こうと、心に決めて、弾き始めた。その時脳内に流れていたのは、またも「決戦スピリット」だった。

挑まずにはいられない
影さえも振り切ってけ
現状の限界

乗り越えろチャンス
全力をかけた

怯えることはない
確信へ変われ

高く 高く 高く
舞い上げれ

味わった敗北の傷は
涙あつて花を咲かせる

「諦めろ」と笑えばいいさ
そんな言葉 僕は知らない

本選の一日前に五十嵐さんから言われていたことも思い出した。

「自分の演奏が一番だと審査員や観客にどんどんアピールしなさい。自分が一番だってね！」

「華麗なる大円舞曲」という曲名がついているなら、大げさに堂々とやるしかない。私は舞い上がってしまった。強弱は気にしていたつもりだったが。画面自賛だが、弾いている時、メロディーがつかなくてきれいな音になった。

弾き終わり後は達成感に満ちていた。賞など何も望んでいなかった。ただ、弾けただけで満足だった。その時、初めてピアノをやって良かったと思った。五十嵐さんに会えたおかげで、私は自分の弱さから、脱出できた。あの一つの出会いがなかったら。

梨香も見事に弾ききった。梨香が最後だったので、あとは審査を待つだけだった。私は、母と玲奈と合流した。いつ仲良くなったかはわからないが、二人は仲良しそうに話していた。

「すごかった！ もう、感動しちゃった！ 生の演奏聴けて良かった！」

「あなたが、楽しそうにピアノを弾いてて、本当に嬉しかった！」

「まだ結果が出てないのにやめてよ！ 照れるじゃん……」

普通に幸せだった。ずっとこの時間が流れていてほしいと思った。

いよいよ、結果発表だった。どんなふうになっても私はよかったが。

「二位は松本梨香さん」

梨香は悔しそうだった。そして前に出ると、思い切り私をにらみつけた。そのとたん、大きな歓声と拍手が聞こえた。一位が発表されたのだろう。よく聞いてなかったたので、私も交じって拍手をした。そんな時に母に、

「バカ！ あんたよ、一位は。おめでとう!!」

と言われ、玲奈には、

「何拍手してるの？ おめでとう！ あんたは、私の自慢の親友だよ！」

と言われ、ハグされた。

コンクールの表彰式が終わり、ぼんやりしていた時に、母がつぶやいた。

「あれ？ 五十嵐美紀さんが、Twitterで珍しくつぶやいてる……」

一瞬、自分の耳を疑った。

「五十嵐美紀さんて、そんなに有名な人？」

「あんた、知らないの？ 日本のめっちゃ有名なピアニストで、世界でも活躍している人だよ」

思い出した。昔、私と同じように「神童」と呼ばれたピアニストで、ピアノの世界で、知らない人がいないくらいに超有名な人だ。私は、そんな人からピアノを習っていたのだ。いきなりのこと過ぎて、頭が混乱していた。Twitterで書いてあった内容はこうだ。

「おめでとう！ リベンジ達成だね！ きれいな音だったよ！」

私は、コンクールの後、カラオケに玲奈と行った。もちろん、「決戦スピリット」は歌った。

五十嵐さんに会うことはなかった。五十嵐さんに感謝の気持ちを直接伝えなかったのだが。一つ言えることは、五十嵐さんと玲奈に会えていなかったら、今の私はいなかったこと。

これは、私の身に起きた、小さな奇跡の話だ。

*歌詞の引用は、CHICO with HoneyWorks さんの「決戦スピリット」です。現実味が出るように、本当にある歌から引用しました。